

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12333

研究課題名（和文）Aesthetic Encounters: Classical and Oriental Mimesis in Alexander Pope

研究課題名（英文）Aesthetic Encounters: Classical and Oriental Mimesis in Alexander Pope

研究代表者

大住 めぐみ (Osumi, Megumi)

神戸大学・人文学研究科・特任講師

研究者番号：00779324

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：研究の初期段階では査読付きの国際ジャーナルに研究成果を基にした論文が掲載されました。また、研究者としては初となる単著の著書の出版に至ることが出来ました。複数年に及んだプロジェクトの期間中、国際学会にて定期的に研究成果を発表しました。プロジェクトの締め括りとしては研究成果のより優れた発信方法や媒体について調査しました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未来を築く上においては過去を知ることが重要であり、文献を中心とした研究ではあるものの歴史についての新たな発見や解釈を見出すことを研究成果の学術的意義として参りました。また、歴史や過去についての理解を深めた上で可能な限り現代社会が抱える課題の解決の糸口や貢献に繋げることを社会的意義と認識して研究に励んで来ました。

研究成果の概要（英文）：The initial stages of the project saw the appearance of an article in *Notes & Queries*, published through the Oxford University Press. Research on the crossroads of classical and oriental mimesis culminated in the publication of the book, *Tradition and Emancipation in Horace and Alexander Pope*. This being the first monograph for the principal investigator, the researcher is grateful is the funding provided by the JSPS, which enabled the realization of such an undertaking. Throughout the duration of the project, the researcher continued to deliver papers, in person in England as well as in an online or hybrid format during the pandemic years. The project concluded with investigations on wider and more improved methods concerning one's dissemination of research results. The endeavor included observation of a TedEx conference in North America in the final year of the project.

研究分野：English Literature

キーワード：Art history

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

学位においては西洋古典を長い期間主たる研究の対象とし、博士課程では英文学の中の西洋古典の影響について研究しておりました。課程修了後は博士論文で取組んだ課題をもう一度見直し、きちんと修正を加えた上で一冊の著書として出版したいという思いがありました。出版以外にもこれまでの研究を続けること、そして新しい研究の可能性を見出すために科学研究費助成事業の種目「若手研究」に応募することに致しました。

また、博士課程修了以降に関しては少なくとも教育面では言語としての英語または英米文学関連科目が担当科目の全てであったことも相まって、比重としましては西洋古典より英文学に触れる機会の方が多くなりました。ただし、研究課題名の一部でもあります「オリエンタル」については、大航海時代から植民地支配へと移り変わる中で欧州文学においては古代より変わらぬ西洋古典の影響に加えて中東、アジア、アメリカ大陸の影響が垣間見られるようになったことについての研究を指しております。

本科研費プロジェクトに採択される以前に米国の学会誌に掲載された論文「Eastern Commodities at Hampton Court in The Rape of the Lock」にて西洋芸術における東洋の影響に関心を寄せるようになっておりました。中でも「髪盗人」(1714)に登場する Indian screen や China 's Earth に注目し、当時のインディアンという言葉の曖昧さについて言及しております。Indian screen は暖炉前の囲いとして使用された fire screen、しかも欧州外からの輸入品ではなく模倣品である可能性が高いとし、著者アレキサンダー・ポープの財産目録にはアジアからの輸入品らしき屏風が記されていることを指摘しました。China's Earth においては当時欧州では謎に包まれていた磁器の原料についてマルコ・ポーロの時代より語り継がれた「磁器は約一世紀の間土に埋めることによって形成される」という神話の様な現象に着目しました。フランシス・ベーコンは『シルバ・シルヴァルム』の中で「土に長い間埋もれた」磁器について説明しており、ジョン・ダンやフランシス・クォールズ等につきポープもまた文学作品の中で継承する姿を追う論文となっております。

同じ英文学作品の中でも形式は西洋古典の方式に忠実であっても作品の設定が新しく植民地となった東南アジアの諸島であったり、描写されている調度品や小物が東洋の美術品であることについてより深く調査する価値があると考えようになりました。よって、当時の英文学において西洋以外の影響を表現したことについても研究の対象として含めるに至りました。

2. 研究の目的

上記「研究開始当初の背景」に記しております著書出版以外に、研究開始当時は学生時代より長く続けてきた西洋古典の研究と当方としては比較的新しい領域となる初期近代英文学の両分野の橋渡しになるような研究成果を発信出来ることを主な目的としました。

特に研究課題のおよそ半分を占める西洋文学の中における東洋美術については英語をはじめ西洋の文献がどの位存在するかなどを把握すること、そして同様に国際学会での発表や参加においては西洋の研究者の方々の認識や意見を伺うことも研究プロジェクトの目的の一部として参りました。

3. 研究の方法

研究の方法としましては国内外での資料収集、文献の分析、学会での発表及び意見交換、そして主に論文として研究結果を出版するという流れとなっております。文系の研究ということもあり社会学関連にあるフィールドワークや理系の実験こそ伴わないものの、現地に渡航し当時の建築様式や調度品を博物館や公開されている宮廷などで実際に見る必要があると常々感じておりました。実物を見ることにより研究の新しい方向性や論文のテーマとしてのインスピレーションを得ることが多々あり、また逆に渡航前に日本の図書館の資料集やネット上で写真を見ている時と実際に見ると印象が全く異なったためテーマとして扱うことは難しいと判断したこともありました。2020年度及び2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響により国外は勿論のこと国内も外出自粛推奨期間が長く続きましたが、2022年初旬に国内での資料収集を行う許可を頂き、後に海外渡航も再開することが出来ました。

学会発表に関しては一方通行の発信とならぬよう発表後の質疑応答は貴重な意見交換の機会であることを特に意識しておりました。また、パネル終了後にも残ってご意見や質問を下さる研究者の方々や休憩時間中の雑談のグループに入り交流を試みるなど発信と受信の両側でどの様に視点が異なるかなども注意深く観察し、研究に活かせるように努力致しました。

4. 研究成果

研究成果の形と致しましては著書出版、論文複数本掲載、国際学会にての単独発表に分けることが出来ます。「研究開始当初の背景」にて説明しております著書の出版という目的を果たすため真先に取組み、科研費プロジェクト期間中に達成するに至りました。400ページ以上あった博士論文をページ総数280の単著「Tradition and Emancipation in Horace and Alexander Pope」としてまとめ、2020年に出版に至りました。修士課程及び博士課程在籍の頃より関わってきたテーマであり、分野としては西洋古典と英文学に属するかと存じます。

論文掲載としては当時の所属機関の査読付きジャーナルである *Journal of Inquiry and Research* に博士課程より研究を続けて参りました英国詩人についての論文「To One Another as Christians': Alexander Pope and Jesuits」が掲載されました。カトリック教会とポーブとの関係は現在まで研究が重ねられてきましたが、イエズス会との関係についての研究はまだ開拓の余地が十分であると主張した上で、ルネ・ラバンやジョン・オールダムとの関係を中心に詩人の生涯においてイエズス会と交差した範囲に焦点を絞りました。ポーブとカトリック教会との全体的な関係と比べるとイエズス会との関係は明らかに乏しく、家庭教師等を除き友人や親族に会員はいませんでした。しかし、1715年発表の *A Key to the Lock* の中で登場人物バーニヴェルトは、ポーブという詩人が「イエズス会による教育の過程で腐敗したのではないか」という疑いを掛けます。ポーブは世間の反カトリックと反イエズス会の風潮を認識していましたが、十分な距離と落ち着きを維持していたことが伺えると主張しました。

フランスの古典主義者であり、イエズス会会員でもあったルネ・ラバン(1621-87)の *Of Gardens (Hortorum libri quatuor)* (1665) は当初ジェームズ・ガーディナーによって英訳されましたが、1728年の第3刷の翻訳はポーブとウォルター・ハートが担いました。更に、ジョセフ・スペンスが残した *Observations* の編集者ジェームズ・M・オズボーンは、ポーブがラバンの詩から庭をレイアウトする方法についてインスピレーションを得たと述べています。ポーブが造園の愛好家であったことはよく知られていますが、エキゾチックで革新的な中国庭園よりルネサンスとバロック様式の伝統に倣う姿勢を崩しませんでした。そして、イエズス会修道士による新しい園芸様式の普及についてもその中国の起源にも言及していません。ジョン・オールダムの *Works and Remains* (1685-94) を所有していたポーブはまたその中の反イエズス会の感情を露わにした *Satyrs Upon the Jesuits* (1679) を称賛しました。詩的な伝統を受け継いだことは明らかでもオールダムとは異なり内容、すなわちイエズス会に対する目立った批判的言及は見当たりません。よって、イエズス会を非難の対象にすることもプロテスタント・イングランドのみならず欧州全土に広まっていた反イエズス会の波に乗ることもなかったポーブですが、生涯に亘るエラスムスへの崇拜に垣間見えます。プロテスタントとカトリックの二分法を超越しエキュメニズムの精神を支持するという詩人の試みに今後注目するに値すると指摘しました。

また、同時期に英国にて1849年より刊行が続き現在オックスフォード大学出版が手掛けるジャーナルに「Visualizing Alexander Pope's 'Altars of Japan'」が掲載されました。

「髪盗人」(1714) の中で著者が意図した「shining Altars of Japan」とはどのような東洋の資材と西洋の技術を取り入れた家具であったのかを考察し、複数の可能性を提案しました。ジャパンは西洋の模倣技術であるジャパニングのことを指しますが、本物の漆が使用されることも珍しくありませんでした。当時欧州では中国の漆塗り屏風が頻りに輸入され、分割或いは切断された後に装飾用パネルとして宮殿の壁等に配置されることが多々ありました。日本では紙の屏風以外製造されていなかったため、ポーブのジャパンが屏風を卓上用の板にしていたとすれば、日本を除くアジアからの輸入品若しくはアジアンテイストの模倣品だと考えられます。

また、ポーブの詩の1シーンを使い嗅ぎタバコ入れ用の版彫を製作した画家ウィリアム・ホガースは、ブルーム卿が「雲のような杖」を持って現れる場面を選びました。背景では女性のゲスト達がロココ調の長く湾曲した脚を備えているテーブルを囲んでいます。しかし、漆塗り又はジャパニングが施されたとされるテーブルトップは鋭い角とわずかに起したパイクラストと呼ばれる縁があるため、起源は欧州外の可能性があります。1680年頃のオランダの絵画には子連れ夫婦が「ティータイムを楽しむ」という比較的新しい習慣を描写したものがありません。若い夫妻は無邪気な子供たちと共にパイクラストの縁と「二階建構造」のテーブルを囲んでいます。「二階建」とは元来床に座り使用するテーブルの脚に長さを足し、椅子に座って使用出来るよう改造されたものを指します。同様の十七世紀末のテーブルはイギリスではハム・ハウス及びディラム・パークに現在も残されております。様々な研究者たちがこのパイクラスト様式の起源を琉球諸島、ミャンマー北部、ベトナム、またはジャワ島であると実に様々な仮説を立ててきました。「髪盗人」の設定であるハンプトン・コートに当時まだ訪れたことのないポーブが頭の中で描いたジャパンというのは、日本製漆器ではなく東南アジアを起源とする漆器を活用し欧州到着後に西洋風に改造が加えられたテーブルであった可能性があると推定します。

その他と致しましては現在の所属機関の東アジアの文化や人々に特化した査読付きジャーナル *Journal of Port Cities Studies* に論文「Orinoco River and Aphra Behn's *Oroonoko*」が掲載されました。学会での研究成果発信については2019年に *British Society for Eighteenth-Century Studies* 主催の国際学会にて発表致しました。当該研究プロジェクト以前の2016年及び2017年にも発表したことのある国際学会でした。2019年の発表「From An Isolated Archipelago: Lacquer and Literary Space」の後はパネル・チェアーの歴史家の方やご清聴下さった学者の方がわざわざ後まで残って下さり、文学のみならず現在の美術史や

歴史の研究でも注目されているからこそ続けていく価値があるトピックであるをご教示下さいました。

2020年以降は世界的パンデミックとなってしまいました新型コロナウイルス感染症の影響により、現地まで渡航し発表を行う予定であったFinnish Society for Eighteenth-Century Studies主催の学会も一旦延期となりました。約18ヶ月後の2021年末にハイブリッド形式にて開催された際はまだ日本出入国において書類や検査結果の提出義務が解除されていなかったため、自身の発表「Masculine Identity in Chinoiserie」をリアルタイム遠隔という形で行わせて頂きました。上記のテーマは所属機関文学部の『紀要』に論文「Duality of Genders in Chinoiserie」として後に掲載されました。

研究のみならず教育という観点においても、講義を担当する上で海外での資料収集にて得た知識などを活用することが出来ていることを多々実感しております。この様に実りの多い若手研究プロジェクトに携わる機会を与えて頂いたことに感謝の意を表するとともに、次の科研費課題に活かせるよう日々努力を続けたい所存です。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Megumi Ohsumi	4. 巻 17
2. 論文標題 Orinoco River and Aphra Behn's Oroonoko	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Port Cities Studies	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Megumi Ohsumi	4. 巻 109
2. 論文標題 'To One Another as Christians': Alexander Pope and Jesuits	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Inquiry and Research	6. 最初と最後の頁 253-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ohsumi Megumi	4. 巻 66
2. 論文標題 Visualizing Alexander Pope's 'Altars of Japan'	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Notes and Queries	6. 最初と最後の頁 100 ~ 102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/notesj/gjy205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Megumi Ohsumi
2. 発表標題 Aphra Behn's Homecoming and Oroonoko's Resurrection
3. 学会等名 British Society for Eighteenth-Century Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Megumi Ohsumi
2. 発表標題 Masculine Identity in Chinoiserie
3. 学会等名 Finnish Society for Eighteenth-Century Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Megumi OHSUMI	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Academica Press	5. 総ページ数 280
3. 書名 Tradition and Emancipation in Horace and Alexander Pope	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------